

コミュニケーションから見た日英語比較

山 崎 英 一

(平成16年 9月30日 提出)

暗号としてではなくコミュニケーションの手段として言語が使われているという当たり前の観点は、残念ながら、英語学習者やゼミ生に時として欠けている想定である。学習段階から積極的にこの観点を心がけさせる必要がある。又、学問的には、この観点から日英語を観察することで、コミュニケーションの成立の際には、言語的な特異性や「文化」的な特異性が両言語間の単純な翻訳関係を阻害していることや、その点に各言語の特徴付けをみることができることが見てとれる。

このような視点での分析を行う際に、「文化」が単なる歴史的知識といった静的情報ではなく、推論過程の使いやすさの違いのような動的なものであるという観点も意識していきたい。

以上のような観点から比較考察することで、関係する様々な現象についての洞察が深まる。ひいては、両言語間でのコミュニケーションの成立が必ずしもアプリアリに保証されているわけではないこと、あるいは逆に本来非成立から出発すべきである可能性すらあることがわかるであろう。

キーワード：日英語比較、サピア・ウォーフの仮説、Grice、関連性理論、文化

0：はじめに⁰⁾

本論考は、日英語比較を通しての英語学の導入用としてゼミ生対象の授業(付録参照)を念頭に、それに更にゼミ以上のレベルの発展指導も視野に入れてまとめた論述である。すなわち、この論考は、主な目的としては英語学の成果の授業への適用を図るものであり、その際の手段として日英語比較を利用するものである。なお、本論考の本来の趣旨に鑑み、全体的にはある程度のまとまりを念頭においたが、細部に関しては、学生の思考を促す展開を心がけ、詳細な検討よりは問題提起を重視した。その一方発展的考察に関しては、全体的な整合性や学生各々の興味のある箇所や関心の深さの違いを考えて、注に記すようにした。

以上の方針の下、以下では、語や文の単位を超えたレベル、談話全体やコミュニケーションの観

点から日英語を見ていくこととする。ここに「文化」及びその影響も見出すことができることがわかるだろう。具体的には、英語、あるいは時に日本語の観点から、両者の類似点と、特に相違点とを検討することになる。この際、語単位や文単位での記号列の静的な比較としてみるという旧来の文法論、意味論の観点到留まらず、コミュニケーションの道具としての英語や日本語という捉え方を多少なりとも取り込むこととなる。そのことで、背景にある人間の認知というものも含めての分析が可能となるであろう。つまり、比較の際、基本的な観点として、従来のような、英語と日本語を記号とみなして比較するという立場に立つというよりは、「人間が外界とどう情報のやり取りを行っているか」、「どう周囲を認識しているか」、という最近の認知理論の視点から、両言語の使わ

れ方の違いとそこに見られる認識状況とを考察するのである。つまり、両言語は、暗号とその解読結果の関係にあるわけではない故に、両者間に厳密な**1対1**の対応関係はない、という立場に立ち、英語も日本語も各々が各々の使用環境におけるコミュニケーションの手段であり、使用に際して認知とその活動環境の影響を各々受ける存在であるとの視点で観察するのである。なお、本論考の観点及び趣旨の都合上、言語の使い方や文化のバリエーションに関してはかなり大雑把に割り切っている。つまり、方言や地域・個人による文化差をかなりならした論考となっている。

1: 導入: 共通項—暗号解読ではなくコミュニケーションとしての言語

- (1) Nobody goes there any more because it is too crowded.
- (2) We are not here; we are here.
- (3) A: I'd like to go to see the sea.
B: I have no time.

基本的に日本語でも同様のやりとりが可能であり((1)–(3))、発話される状況を想像することも困難ではないであろう。

- (1) あまりに込み合うのもう誰もそこには行かないよ。
- (2) 僕たちがいるのは、ここではなく、ここだ。
- (3) A: 私、海に行きたいなあ。
B: 俺、時間ないよ。

ここで、少し距離をおいて考えると、日英語のいずれの場合にも、表面的な読みつまり暗号解読的な読みではコミュニケーションの成立が理解できないはずであり、実際のコミュニケーションは単なる暗号解読的なレベルに留まらない深いレベル

(行間) 読み込んでいるからこそ成立できるということがわかる。つまり、(1) (1')では、“知り合いは／めばしい人は(誰も)”等の省略情報(あるいは広い意味での行間の意味)が同定できなければ一種の矛盾文(“込む: 人がいる”対“誰も行かない: 人がいない”)に留まってしまう。又、(2)では“here (ここ)”の指示位置情報(直示の情報)が最初の場合と二度目とが同じ場所を指していると考え場合も矛盾していることとなる。更に(3)では、両発話の行間の意味((3A)“海に連れて行ってほしい”、(3B)“いやだ”)がわからなければ、各自が自身について語っているだけでコミュニケーションが成立している例ではないことになる。これらの情報は言語的には表現されていない(あるいは内容が指定されていない)が、実際の場合面では読み込んで解釈され、コミュニケーションが支障なく成立している²⁾。

日英語共に(暗号解読的な解釈では不十分だが、より深いレベル迄)同様に読み込んで理解できるということに基づき、以下のような仮説群をたてることとする³⁾。

- (4) 仮説a-1: 言語や民族が違って、同じ人間である以上、その背景にある認知機構やその機構の活動原理が異なるわけではない。
- 仮説a-2: 故に日本語英語に関わらず同様に行間は読める、コミュニケーションは成立する。

この仮説は、いわゆる“行間の意味”も含めた解釈に適用されることとなる。この仮説の下では、(1)–(3) ((1')–(3'))において、日英語を問わず同様に理解され、かつコミュニケーションが成立していると判断できることが説明づけられる。これら仮説群は、一見当然のようであり、その分価値が低いようにすら思われるが、異なる文化・言

コミュニケーションから見た日英語比較

語間でのコミュニケーションがますます必要な昨今では、成立しないと困る仮説とすら言えるであろう⁴⁾。

しかし、実際にはこの仮説の成立は、少なくとも無条件には成り立たない。次の(5)群((5)及び(5'))や(6)群をみてみよう。

(5) A: お手伝いしましょう。

B: すみません。

(5') A: Let me help you.

B: #I'm sorry.

(6) Have some.

(6') 少し食べろ。

(5)群、(6)群の各文は、日英語(文化圏)において、少なくとも使用範囲(場面)が異なる。原因はなんだろうか。例えば(5)は、荷物を持って困っている人と荷物持ちを申し出た人との会話であるとして、何の違和感もなく成立するが、同様の場面で(5')の会話が起ころうとは思えにくい。もし(5'B)が日本人による英語発話であり、Aが英語圏(非日本語圏)の人物であった場合にはAはショックを受けるであろう。つまり、日本語ではありふれた展開であるが、英語文化圏では、Bからは謝罪や同情を期待する場面ではなく、あくまで感謝を予想する状況であり、“I'm sorry.”では「手伝ってもらおうとは残念だ」的解釈になりかねない⁵⁾。

(6)群に関しても同様のことが言える。英語では特に問題ない例が、直訳の日本語では使用が非常に困難か、少なくとも使用状況がかなり狭い。つまり、(6)が命令口調を求める場面以外にも使えるのに対し、(6')は命令関係の認められる状況以外では、せいぜいざっくばらんな友相手にしか使えないであろう。(6)が物を勧めているような

場面では、日本語で例えば(6'')のように表現するであろう。

(6'') どうぞお食べください⁶⁾。

ここで、仮説a-1、a-2が正しければこれらのずれは生じないはずである。つまり、同様の機構で同様な解釈が可能なのであれば、同様のコミュニケーションで落ち着かずであるが、これらの例から明らかなように、実際はそうではない。又、言語的な現象ではないが、例えば、英語圏をはじめ西洋文化圏では一般にアイコンタクトが重要であるのに、日本等一部の民族では目を見つめては失礼な感を与えるという違いが観察できる⁷⁾。このことは、少なくとも仮説a-1から考えると反例に思える。上記の言語による例も踏まえて考えるならば、仮説a-1のみならず仮説a群全体成立しないことになる。このような結論をさけることはできないのであろうか。ここで、仮説a-1・a-2を、廃棄するのではなく修正程度にとどめ、そのことで少なくとも基本枠の維持を考えるのであれば、上記の反例的な現象を説明する要因を考える必要がある。

以上のことから阻害要因について検討しよう。具体的には、異言語・文化における同様の解釈処理を妨げたり、コミュニケーションの非成立に関与したりする要因であるとして(7a)(7b)を想定し、検討を加えることとする。

(7) なぜ異なる振る舞いをするように思えるのか：阻害要因

- a. 言語的違いの存在
- b. 「文化」的違いの存在

(7a)は更に大きく(8)のように分化できよう。

(8) 言語的違い：

- a. 意味的・知識の違い
- b. 統語的・体系的違い

(8a) に関しては、対象の両言語・表現で微妙に異なる“意味”を伝える状況を想定している。厳密にはこの範疇の例は、文化的・歴史的背景の違いの結果によることも考えられるので、(9a)との区分は採用する言語理論次第かもしれない。一応念頭においている例は、次節2.1の例である。(8b)は二つの対象言語の一方にはあるが、他方にはないか、発達していないか、かなり異なっている文法手段の違いのことである。例えば、英語に着目すれば、the/a/Φの使い分け、日本語よりも複雑な時制及び相の体系があげられる。一方、日本語に着目すれば、英語とは発達程度がかなり異なると考えられる敬意体系や、「被害」等独特のニュアンスを有していたり、自動詞でも表現可能である受動態があげられる。

一方、(7b)に関しても更に下位区分することが可能であろう。

(9) 「文化」の違い：

- a. 「文化」の知識内容の違い。
- b. 思考の傾向（の違い）という意味での「文化（の違い）」

ここで、「文化」と括弧付にしてあるのは、一般での文化という概念が、一方では幅広く、時には言語自体も文化の現れとして含まれるものとして捉えられがちであるが、他方では狭く、(9a)のような知識の違いは想定しても、(9b)にあげるような思考の傾向などは含まないことも多いためである。つまり、これらの点で一般での文化とはずれた対象を指していることに注意を喚起するために括弧をつけている⁸⁾。

以下でも一部触れる(2.1の(1))が、(9a)で想定されている現象としては、歴史的背景の違いなどによる習慣の違い等である。例えば、日本語圏では、玄関先で靴を脱ぐのが常識であり、脱がないで入ろうとする異文化者には「靴を脱いで」等の発話をするであろうが、日本での習慣を知らない者だと更に説明を加えないと、(発話を構成する文の意味自体は理解できても)十分なコミュニケーションは成立しないであろう。又、現在の日本語圏では実生活においてまず関係ないが、旧暦の正月の話をしている場合には、西洋式正月を前提とする英語圏の人とコミュニケーションが成立しない可能性はある。

(9b)は、思考展開や発想の違いを要因としてあげている為、例えば、上記(5)の、荷物持ちを手伝った非日本文化圏者が「すみません」とあやまられてショックを受ける場合などを説明付ける要因と考える⁹⁾。しかし、思考展開や発想は個人差も大きく、(9a)と違って事実的・観察の違いとして目につきにくいと考えられるため、検討しづらい項目である¹⁰⁾。が、その分逆に、もっとも重要な要因であるかもしれない。更に、思考の傾向や発想の違いは、その実態次第では、仮説a-1への根本的反例となる可能性もある¹¹⁾。

2：具体例、検討例

前節での仮説a群とその反例的現象及び説明要因の想定を基に、更に具体的に分析を行ってみよう。なお、分析を進める際、(8)と(9)での議論でも触れたことであるが(更に注8を参照されたい)、コミュニケーションの阻害要因が言語的なものか、あるいは「文化」的なものか、は即断できるとは限らないという注意が必要であろう。更には、言語が「文化」の影響を受ける以上両要因共に関与している場合も当然多いはずである。更に言えば、分析理論次第で答えが変わる可能性も

あろう。

又、第0節で断ってあることでもあるが、言語に方言や個人語があるように、「文化」にもバリエーションや個人差がある（西洋と東洋、英語圏、英・米・濠等、地域、コミュニティ、年代、家族、個人等々での変異等々）。特に思考の流れの傾向などは、いわゆる気質や性癖における個人差として捉えられる面も多く、全体の傾向が個人レベルの例に必ずしも反映されないと考えられる。ゆえにここではごく一般的な比較ということになる。本論考の趣旨の観点から重要なこと（のひとつ）は、（もちろん最終的には重要なことであるが）詳細あるいは厳密な分析を行うというよりは、学生にできるだけ例をあげさせ、様々な観点から検討・考察させることである。

2.1：おそらくは単語レベルでの違い、言語的な違い

2.0での全体的な注意を念頭に、それでも主に語彙的な問題として（つまり(8a)が主要因であるとして）捉えるのが（その後論証する、あるいは逆に反駁する、のいずれに進むとしても）よさそうな例からはじめよう。「文化」というある種捉えどころのない要因によるものを後回しにし、比較的直感的に捉えやすそうな側面から徐々に不明瞭な現象に入っていくということである¹⁰⁾。

扱いやすいと思われる言語的な例で、更に扱いやすいのは単語あるいは表現レベルでの違いであろう。ここでは従来でいう「多義語」の例とされる違いに阻害要因を探してみよう。まず、flyと「飛ぶ」を取り上げる。

(1) fly

A: My car has broken down! How can I go there?

B: You can fly there.

(1') 飛ぶ

A: 車が故障しちゃったよ。いったいどう行けっていうんだろ。

B: {#飛べばいいじゃない／?そこへ飛んで行けばいいじゃない}。

ここで、flyは「飛行機に乗る・で行く」に意味が拡張可能であり、(1)ではこの意味で使われている。一方、日本語の「飛ぶ」は（比喩的な意味として「急いで行く」とは解釈できても）文脈の補助がかなりないとこのような拡張は困難である¹³⁾。このような単語の「意味」のずれを無視した場合、コミュニケーションが成立するとは限らないのは当然である。

同様の例として(2)群をあげよう。

(2) move

He will move next week.

(2') 移動する・動く

#彼は来週移動する。

moveがその意味をより限定された意味、つまり「引っ越す」に拡張可能であるのに対し、日本語の「移動する」や「動く」ではこの拡張は困難であり、該当する意味を表現するには独立した単語である「引っ越す」を使う必要がある。

この例に、似ているが多少とも異なるものとしてwearをあげよう。

(3) wear

a. She wore the red dress.

b. She wore the red dress to the party.

(3) 着ている

a'. 彼女は例の赤いドレスを着ていた。

b'. #彼女はそのパーティーに例の赤いドレスを着ていた。

b". 彼女はそのパーティーに例の赤いドレスを着て行った。

wearが「着て行く」の意味に拡張可能なのに対し、「着ている」にはこのような用法はない。

次のeatでは、自動詞・他動詞で意味が微妙に変化することが問題となっているのであるが、そもそも日本語では文法的にここでの違いを捉えるすべがない例ともなっている。

(4) eat

a. Did you eat?

b. Did you eat it?

(4') (もう) 食べた?

自動詞のeat、つまり(4a)でのeatは通常、「不特定のものを食べる」つまり「食事する」という意味に解釈される。一方他動詞時は、定・不定は目的語により決定される。つまり、「((目的語がanything等不特定のものの場合以外) 特定のものを食べる)」こととなる。故に(4b)は特定のものをさしていることを示すitにより、あえて言えば「例のものをもう食べたか」の意味となる。日本語にはそもそも名詞句に(少なくとも文法上の義務として)定性を示す必要はないため、(4')は文脈次第で(4a)とも(4b)とも解釈することができる。微妙といえば微妙な例ではあるが、特に(4a)により誤解となってしまう状況はありえるであろう。

動詞関連の例から次に助動詞関連の例へと進み、had betterの使用によりコミュニケーションの成否が影響を受けると思われる例を見てみよう。

(5) a. You had better study Japanese harder.

(5) a'. もっと日本語を勉強したらいいよ。

例えば(5a)を英語圏の友相手に発するとすると、aだとむっとされるかもしれない。一方had betterの定訳的な訳を用いた(5a')は(少なくとも日本語圏では)特に問題ないであろう。ここで、英語圏では自分のことは自分でする文化なので、(5)で話しているような内容は他者が口出しすることでない(自立性)から、つまり(5a)は「文化」的理由で不適なのである、と考えることも可能に思えるかもしれない。ところが、類義語あるいは定訳のイメージではむしろきつくひびくはずの(5b)は、問題となる可能性が(5a)よりは低いと思われる。述べたように、日本文化圏よりは一般に自立性を重視することから(5b)も問題がないとは断言しにくいだが、ここでは「文化」以上に言語的な違いが大きいことになる。

(5) b. You should study Japanese harder.

日本語の定訳ではhad betterが「するほうがよい」「したらよい」、shouldは「すべきである」であるが、日本語の定訳から受けるニュアンス的な意味がかなり異なっていると考えられる。つまり、had betterは(おそらくは仮定法的発想と思われるが)通常、「しないと大変なことになる、ひどいことになる」という否定的な状況を念頭にした発話で使われ、故に脅しや警告・注意になりやすいのに対し、shouldのほうがむしろ日本語の「するほうがよい」という情報と同様の助言を表現できるようである。このように考えてくると、(5)の例は(文化的違い以上に)単語の意味のずれによるものであるといえるであろう。

英語内での類義語の違いと、更には日本語ともずれている例としてcould/was able toと「できた」をあげておこう。

(6) a. He could do it.

b. He was able to do it.

b'. 彼はそれをする事ができた。

出発点的な観察としては、couldを用いた(6a)はheが指す人物に関しての過去の一般的特性(能力の有無)について語っているので、必ずしも動作の実行を意味しない。むしろ問題の時点で「する能力はあった(がその能力は使わなかった)」「しようと思えばできた(がしていない)」の場面で使われることが多いとされる。一方was able toを用いた(6b)は過去の一点での行為に関して語っており、実際に行う場合に用いる(故に原則一度の行為)ので、「した」を含む場合の「できた(のでした)」に近いものとなる。又、(6b')としてあげたように、日本語の「できた」は「実際にした」場面で使われることが多く、was able toのほうに近いように思える。ただし日本語の「できた」も(6b'')でわかるように実行の意味を打ち消すことが可能であることは注意すべき点であろう。

(6b'') 彼はそれをする事ができた、が実際にはしなかった。

このような違いから、学生への指導として、実行可能性に関してはっきりしている例をcould/was able to/「できた」に関してできるだけたくさん集めさせ、反例の有無も含めて調査させるのは、各表現の意味の理解や違いの理解を学習させるのみならず、英語学的思考を促すのにも非常に有益であろう¹⁴⁾。

日本人英語学習者がよく間違える例ということでteacherも扱っておこう。出発点として、teacherは単独だけでも、あるいは、例えばteacher Yamadaの形でも、呼びかけに使われることはほとんどない。一方「先生」は単独でも「山田先生」の形でも呼びかけに使われうる。このような違い

は、なぜそうなるのか、を考えなければ単に単語の用法の違いということになる。ここで、敬意の有無、あるいは単に職業を表すかどうか、の違いという観点から両表現を比較してみよう。ここで、teacherは職業、あるいは役割を表す表現にすぎないと考えられ、特に敬意があるわけではないと思われる。この点で社会的上下感を反映させたい「先生」への呼びかけ語には使いづらいと考えてもよさそうである。この観点から、一方の表現である「先生」を見ると、通常敬意があることになっており(実際に教員に対して敬意があるかどうかとは別である、というよりはもはやない、というのが定説であろう)、上記のように呼びかけ語として使える。傍証的データとしては、「先生」とは異なり、「教員」「教師」はteacherと同様呼びかけに使われないと同時に、職業をあらわす表現に過ぎず、敬意はない。一方、英語でも、masterは呼びかけに使われうるが、職業というより社会的上下や位置付けを表すと共に、敬意も表すようである。又、英語でよく使われるMr. Yamada等は職種には関係ないが、社会的上下に関しては、ファーストネームに比べ相対的に敬意があると言える。このことを示す事例としては、生徒が教師には例えばMr. Smithと呼びかけるのに対し、教師のほうは生徒にはファーストネーム(例えばJohn)と呼びかけることがあげられる。なお、他の表現との対比上敬意がでるわけではなく、表現自体に敬意が含まれている呼びかけ表現としてはsirなどが他にあげられる¹⁵⁾。

以上阻害原因が単語や表現レベルにあると思われる現象を見てきた。もちろん、Carston (2002) や Recanatì (2004) らの最近の論争にもあるように「なにが、どこまでが、文字通りの意味か」というのは二言語の単語の意味を比較する際にも非常に重要な問題である。隔たりのほうが大きい表現同士を比較するという意味のない比較をしてしま

わないためにも更なる分析が必要であることはいうまでもない。

又、単語レベル、特に前節での(8a)の現象と考えられる例を見てきたが、前節(8b)の現象も簡単に触れておきたい。例えば日本語の「自動詞受身」について見てみよう。これは(7)群のような例のものであり、基本的に英語にはこれに受動態の形で直接対応する例はない。

(7) a. 彼は雨に降られた。

b. その女性は子どもに死なれてしまった。

つまり、この受動文は、基の情報として(8)に表現しうる情報を有していると考えられるが、これは自動詞文であり、英語ではこの場合受動態にはできない¹⁶⁾。

(8) a. 雨が降った。

b. 子どもが死んだ。

他にも敬意表現の使用が体系的に存在する日本語はその情報を英語に直接反映しにくく、そのことからコミュニケーションが阻害される可能性もある(ただし、敬意は高度に社会構造という「文化」的背景を有するため、この現象も又、文化的議論抜きには分析困難であろう)。

2.2: 類義語の反復: 言語の違いか思考の違いか

前節では比較的言語的要因と考えやすい現象を検討した。以降は徐々に文化的要因との区別がつきにくいもの、あるいは文化的要因が主であると考えられるものへと移っていこう。

本節では類義語の反復についてみてみよう。程度問題ではあろうが、英語では比較的、第三者・物を示す際に、類義概念をあらわす表現でどんどん言い換える傾向にある。一方、日本語において

は、第三者・物を指す際同一の内容を表す場合には(助詞や助動詞等他の文法手段でわかる場合が多いので省略も多いが、省略しない場合には)、同一の表現(名詞句や固有名詞等)を使い続けて伝達する傾向にある。

この傾向の下、次の(1)を検討しよう。この例において、the lieutenant(「警部補」)とthe policeman(「警官」)は同一人物である。つまりこの場面において警察関係者は一人しかおらず、英語話者にとってはそう理解するのが自然な解釈で、特に紛らわしい場面ではないようである。しかし、英語学習中の日本語話者である学生がこの英文を読む場合、lieutenantの定訳を知っているような場合でも多少とも紛らわしく思われ、警察関係者は最低2名いる、と考えてしまうのではないだろうか¹⁷⁾。

(1) “This can't be easy for him,” the lieutenant said. Then he went outside to find Mike. Nancy followed, with Ned close behind.

“You seem pretty shook up,” the policeman said to Mike, who was sitting on the front steps. “You must care a lot about this girl.”

“I do,” Mike agreed. Then, quickly, he corrected himself. “Did.”

“Mike, is there anything you can think of that would explain why Rachel might be in danger?” Nancy asked.

“Or what might have made her leave that note?” Ned added.

“I know what you think,” Mike snapped, still holding Rachel's jacket across his lap. “You think maybe I'm connected with this somehow, that I wanted to get even with Rachel or something! Well, I wouldn't hurt her. I really loved her!”

“That's not what we're saying, son,” the

lieutenant said in a gentle voice. “ We're just looking for some kind of lead. ”

Carolyn Keene (1998) The Nancy Drew Files: Collector's Edition

又、(2) においてsecond-bornsはmiddle childrenの言い換えに相当しているが、日本語話者にはわかりにくいと考えられる。

(2) Middle children, being neither the oldest nor the youngest in the family, tend to feel neglected and insecure. Yet, being sandwiched between siblings, they are often the family peace-makers, and so they learn to be flexible and realistic. Research has shown that while first-borns tend to be high-achievers, second-borns tend to be more peer-oriented, having more friends and socializing more easily.

このような類義語の反復に関する傾向が異なる理由としては、例えば次のように考えられる。つまり、日本語と比べ主語などの省略能力が低い英語において、代名詞等種々の言い換え表現が発達したこともあって表現の選択肢がさまざまある。このため、例えば、同一表現の連続は「芸がない」ように考える文化が生まれた可能性がある。そして、英語圏では、問題の文化ゆえに言い換えを学校の作文の指導時に教えていると考えられる。一方日本語ではこのような文化は生じなかったと考えられる。これが類義語の反復に関する傾向の違いを生み出す、と考えるのである。もしそうなら、この点に関しては、情報処理の観点からわかりやすさ(処理労力の低さ)を求めた日本語に対し、後学的理由、つまり「文化」的な理由であえて異なる表現を選ぶ英語、という記述も成り立つであろう。

2.3: 「時間順読み」対「結果-原因」読み: 「思考手順・文化」の違い(?)

次の例も日本人にとってわかりにくい現象であり、広い意味での「文化的要因」が関与していると思われる例である。

(1) Jane broke her leg. She fell down.

(1') ジェインは足を折った。彼女は転倒した
{のだ／からだ／#Φ}。

ここで、英語話者にとって(1)は「倒れたのが足を折った原因である」、つまり二つの文が、「結果-原因」の順である、と容易に理解できるが、日本語ではこの場合「からだ」「のだ」等を求め、ない場合「折った後転倒までした」という解釈にしかない。逆に言えば、英語学習中の日本語話者には(1)の問題の解釈は非常に困難なものと言えるであろう。つまり、「のだ」等有標の表現がない場合、通常日本語では英語以上に「時間順」としての解釈に固執することとなる(状態の原理の下位則「順序正しく述べよ」に英語以上に固執する、と記述することもできよう)。ここで、(1)でのような、「結果-原因」が可能なのは、「重要なこと・結論的なことほど先に示す」といった英語圏、より一般的には西洋圏の文化に根ざすこれもまた、後学的思考傾向のためと考えうるであろう。このような学習も広い意味での「文化」的違い(生得的違いではなく後学的違い)と言えそうである¹⁸⁾。

なお、英語学習中の日本語話者に多い(2)のような表現は、(日本語では特に問題ないと言えようが)英語の規範文法的には、つまりbecauseが節同士を接続する接続詞であるとみる限りは、問題である¹⁹⁾。

(2) Jane broke her leg. Because she fell down.

参考ではあるが、(1)とは対照的に(3)の解釈が限定されることに注意したい。

(3) Jane broke her leg and she fell down.

ここでは足を折ってから倒れるという、語順を反映した意味が支配的である。すると(1)で「結果-原因」読みを出す解釈過程は、完全にデフォルト的なわけではない、と推察できる。

2.4: 展開の表示: 順接・逆接の明示の義務性の違い

英語のif文には時に譲歩条件文(even if文)的な解釈があり((1')), これは日本語では通常困難である((1) (1''))。

(1) Will you go out if it rains?

(1') 雨が降れば出かけるの?

(1'') 雨が降ってもでかけるの?

このことは、英語では譲歩的な解釈を行うのに必ずしも譲歩の表現が言語化されていなくてもよいのに対し、日本語ではそのような表現が義務的であることを示す。似たような現象として、and発話にも逆接、つまりbutに近い解釈がありえる(が日本語の対応例では困難な)ことがあげられる。このことを別の観点から捉えなおすと、英語では逆接系の守備範囲に順接の表現が食い込んでいると言えそうである。一方、日本語の場合は逆接は基本的に「だが」や「しかし」で明示しなければならず、むしろ「しかし」のほうが順接とさほどかわらない“軽い”意味で使われることもあるという点で順接の領域を侵食している。

更にパラグラフ内の各文の展開においても、英語では順接・逆接等の連結が連結語等明示的手段で(つまり言語表現で)表現されないことが、日

本語よりは多い傾向にあるようである。(なお、中国語では英語よりも更に文の連結関係の明示度が低いらしい²⁰⁾。)

2.5: 数の厳密さ

他に英語と日本語とで異なる現象で、言語的な違いというよりは思考の問題、つまり「文化」的要因によるものと考えうるものとして、数をどこまで厳密に表現するか、というものがある。つまり、英語圏では比較のおおらかなのに対し、日本語圏では比較的厳密と言えそうである。

(1) You must arrive **10** minutes before the departure time.

(1') 出発のお時間の**10**分前においでください。

(1) は日本語圏での(1'')に相当すると思われる。

(1'') 出発のお時間の**10**分前までにおいでください。

一方、個人差があるようだが、表現の対応から(1)の日本語版と考えられる(1')の解釈は「丁度**10**分前」のように感じられ、日本人には(1)は多少とも奇異に思われる。ここでの現象が、言語的な要因、例えばbeforeの意味範囲と「前に」のそれとが異なることから起こる可能性ももちろんありえるが、英語でもat leastとつけて厳密化することが可能であることを考えると、そもそも日本語ほど限定的な時間として解釈しないからここではつけずに発話されていると考えてよさそうである。

このような現象は、もちろん文脈によっても異なり、ビジネスアポイントメントの場面等では、英語圏でもかなり厳密な表現がなされる。このことはこの種の厳密さが状況に左右されること、特に社会的な要請を受けていることを示唆してい

る。この点に関し、英語圏に比べ日本では、一般に交通手段等の時間は非常に正確であることが求められている。分単位はもちろん、時に秒単位での管理が徹底されることもある。このような社会的要請の下では、数分の誤差も問題となる場合がある。日本に育ったものはそこでの経験として時間を厳密に読み込もうとする傾向を示し、それが(1)群での差を生んでいるのではないだろうか。

2.6: 言語的要因なのか「文化」的要因なのか、はたまたやはり認識方法が異なるのか

以上、様々な例を見てきた。一見ばらばらの現象の寄せ集めにも思えるが、あえて言えば共通項がある。つまり、どの現象も日英語・日英語文化圏のずれが些細か極端なものでない、といえるものばかりであったのだ。しかし日英語を比較すると根本的にずれているものがある。まだまだ軽いずれとも言えなくはないが、(1)などは日本語に直訳しても全く理解できない((1'))。

(1) I'm all out of tea.

(1') #紅茶の外に私はいる。

(1) は実質 (2) に対応するが、逆に (2) をcut等を使って英語に直訳しても理解不能であろう。

(2) (私の) 紅茶が全部切れちゃってる。

このような(比喩的)発想自体日本語圏でのそれとは異なると考えられるので、直訳は全く役に立たない。(1) (1')での違いを支えているのはいったい何であろうか。単純に熟語とその対応形の有無の問題かもしれない。言語的だがもう少し手の込んだ違いかもしれない。それよりも「文化」的なものとも一見思われるが、「文化」的と言っても、思考のパターンの使いやすさが主な違いと言うよ

りは、もっと根本的な認識の違いがある(つまりは仮説a群への純正な反例である)ようにも見受けられる。

このような例や、更にはもっと両言語らしい表現の発話を比較分析することで仮説a群への評価が更に詳細に可能となるであろう。

3: 結詞

以上、日英語で同様な解釈が可能な例を出発点として作業仮説a群をたて、この仮説への反例とその対処とを検討してきた。以上の流れでは、大きくは、言語的あるいは文化的要因を考慮することにより、必ずしも仮説a群を廃棄しなくてもよい、むしろ仮説a-1・a-2を基盤にすることで、阻害要因を考えることが可能になるとの立場で観察を進めてきた。つまり、「コミュニケーションは文化の違いがあっても可能である」という前提にたって、異文化・異言語間での誤解の原因(理解の障害)を考えることができるものとして論を進めてきた。ここでの、言語的違いによるのか「文化」的違いによるのかの絶対的判断は難しいが、コミュニケーションを観察することで色々な「文化」的違いも多少とも垣間見ることができたと思われる。又、仮説a群(あるいは修正版)を想定することで、コミュニケーションが成立しにくい場合それが本来の姿だと見なすことなく、成立を阻害する要因を探求しようとする視点は、学生に英語や英語圏の文化を更に深く見る差異の指標ともなりえるであろう。

が、結局のところ、途中の議論も踏まえた上での結論として、仮説a-1やa-2は維持すべきなのか、それとも廃棄すべきなのだろうか。そもそもこの仮説a群は、文化が言語に影響を与え、更には言語が思考や外界の認識方法を決定する、あるいは少なくとも影響を与えるというサピア・ウォーフの仮説とは対立する観点から出発している。更に

言えば、国際化という流れの中で、「理論上成立すると予想される」という純学問的なものであるというよりは、コミュニケーションが異文化間或いは異言語間で原理上成立しえないのでは困る、つまり「(修正する必要はあるかもしれないが、大枠的には)成立してくれないと困る」という実利上の要請によるものにすぎないとすらいえるであろう。更に、維持する立場であっても、以上の分析からもわかるように、仮説a群を修正する必要はあろう。その場合、具体的にどう修正すればよいのだろうか。何か、例えば仮説a-3とでも呼ぶべきもの、の追加の必要性はどうだろうか。あるいは、むしろこの観点からの分析をあきらめ、別の仮説体系(仮説b群)や、全く異なる、あるいは反対に位置づけられる仮説(例えばサピア・ウォーフの仮説)を、より真理に近いものとして認めるべきなのだろうか。少なくとも言えることは、最終的な答えは簡単にできるものではなく、今後も様々な例とその分析・考察が必要であろうということである。又、仮に実利的な要請による仮説であったとしても、本論考でのような仮説群をたてたことで、これを軸に二言語の比較が行いやすくなり、全ての例に対してとは言えないまでも、かなりのところまで比較が行えるのである。性急に結論を出さず今後も様々な現象の発見・観察や分析・検討を進めていくべきであろう。

注:

- 0) 本論考の審査の際に、二名の審査員の方々から有益なご指摘をいただいた。ここに感謝の意を表したい。全般的な注意に関して適宜表現を修正する等してご指摘に応えたつもりである。もちろん、残る問題は全て山崎本人に帰する。
- 1) 語用理論である関連性理論的には富化(enrich)によって復元される、意図された表意(explicature)の非表現部分ということになる。

- 2) (1)―(3)の英語を学生が理解できない場合には、日本語への直訳や“翻訳”に注意が向けられすぎていて、使われるであろう文脈を想像するということに向ける余裕がない、ということが理由として想像できる。これは、英語を単なる暗号であるとして考えているということであり、“コミュニケーションのための手段”として英語が使われているという認識が弱いためと考えられる。語用論的な視点を導入することで、この観点への注意を補わせることができるであろう。
- 3) もちろんこれは作業仮説である。つまり、思考を進めるための出発点であり、最終的には論駁され完全に否定されることも可能性としてありえることとなる。実際、すぐ下において反例を提示する。
- 4) 仮説a-1を念頭に、つまり、同一の機構を有しているという前提の下で、その機構の使い方が異なっているという観点、より具体的には「会話の諸原理」の使われ方が異なるという観点から、本論考での諸問題等を検討したものに山崎(2003)がある。「会話の諸原理」の適用の違いという形で記述できる一方で、これらの問題は理論枠次第ではその根本原因を下記の要因(8)や、特に(9)に還元することも可能と考えられ、事実2節ではそのような提言も行っている。このように、本論考での展開と必ずしも対立するものではない。ただし、最近の関連性理論のように、いわゆる「文化」に関すること全般を独立したモジュールで扱う(例えばZegarac(2002)参照)といった観点も含めて考えると、最終的な分析の形態としては更に抽象度の高いレベルでの解法ということになる可能性も高い。最終的な分析に関しては今後も考察を続け、別稿としてまとめたいと考えている。
- 5) (5)の発展として以下のような点にも注意したい。つまり、(5)群に関して、以下の展開では「文化的な違いが大きい」とみているが、言語的な違いがある可能性も高い。つまり、ここでの「すみません」は感謝の念をあらわし、その点で「ありがとう」の類義表現であり、その意味が“I'm sorry.”にはない、というだけのこともかもしれない。

なお、「すみません」は謝罪以外に感謝の場面でも使えるが、「ありがとう」は基本的に感謝の意味

コミュニケーションから見た日英語比較

のみで謝罪には使えない(つまり互換的な類義とは言いがたい)点で、使用域が異なっている点も興味深い点である。この点からは、「文化」的な要因から分析するほうが見通しが良いと言えそうである。つまり、日本の「文化」圏では、このような場面において、相手の労や相手への迷惑感から謝罪すべきであると考え、謝罪し、感謝の念はそれに基づき派生的に(行間意として)伝達される、と考えることができる。一方英語圏ではこのような発想(「文化」)はないので、ストレートに感謝すればいいのである。このように、「文化」的な観点から考えるならば、謝罪することで感謝の念も伝えられるが、感謝の表現には謝罪の意味までは含まないことを説明できる上に、謝罪系の表現(「ごめんなさい」「申し訳ない」「悪いね」)がこのような場面で一般的に使用できることも説明する。つまり表現単位での多義性の問題ではなく、謝罪系の表現一般から生じる行間意(グライス派で言う会話推意)であることになる。

又、上記でも触れたように、謝罪が期待される場面自体、日英文化圏で異なるという観点も重要であろう。例えば、(a)は(a')よりも限定された場面であろうと考えられ、このこと自体検討対象となりうるであろう。

(a) A: Oh, it is cold in here.

B: I'm sorry.

(a') A: ここは寒いね。

B: {すみません。／ごめんね。}

6) このような例は非常に多い。他に(a)群～(e)群を挙げておく。

(a) Help yourself (to drinks).

(a') 自由にとれ(自分で飲め)。

(a'') ご自由にどうぞ(ご自由にお飲みください)。

(b) Sit down.

(b') 座れ。

(b'') {座って。／どうぞ。}

(c) (レストランでウェイトレスが客に) Enjoy!

(d) (医者が患者に) Do some more exercise.

(e) Have a good {time / day / trip}.

なお、中にはpleaseをつけてもいいもの、つけるほうが多いと思われるものもある。一般的には、いわゆる命令文を用いた場合に、聞き手の利益となるこ

とを表現する場合(つまり「命令」というよりは「勧誘」や「助言」の場合)には、pleaseは必要なくなったり、つけると逆におかしくなる傾向にある(Leech (1983) 参照)。一方でここで扱っているような日本語の命令文の場合、「命令」の感が強く、通常は「勧誘・助言」には不適切である。ただし、よく言われるように、関係が近くなればなるほど雑な言い方や命令口調な表現でも「命令」の感が生じないとされるが、そのような例として、仲のいい友達相手であれば「勧誘・助言」として使いうると考えられる。更には、そもそもpleaseの近似表現と考えられる「どうぞ」と共起しない((b'''))。

(b''') #どうぞ座れ。

(6) 群のような日英語のずれに関しては山崎 (1995) 参照のこと。

又、本論考とは直接関係しないが、(c)のenjoyが本来他動詞であり、自動詞的な意味にするにはoneselfを求める位である(例: Enjoy yourself!)のに対し、このような場面では目的語を一切とらなくても使用可能であることも一考の価値のあるテーマであり、学生の興味を増すにも有益かもしれない。

7) ただし、実際に見るのは主に目というよりは顔の輪郭中心だろうとは思われるが、日本でも、「ちゃんと目を見て話さない」等の指導が生徒や子どもに対してなされている。一方、英語圏でも目を凝視し続けているわけではなく、厳密には視点は他所に向いたりもしていると思われ、相手の眼球に向けられるタイミングや時間の程度の問題という側面もあるであろう。

8) 更に、ここでいう「文化」が、上記のように(8a)といかに区別できるのか、という問題もある。(8)と(9)との究極の違いの有無という問題もあり、少なくとも導入期の学生などは直感的区分にとどまったり、違いが理解できない状態でも指導上かまわないであろう。もちろん、特定の理論枠を採用した場合にはこの区別が重要になる可能性は高い。

9) 本論考でのように、思考の傾向を「文化(の一種)」とするのなら、上記(5)群で見られたような日英語の差異には文化(思考傾向)の違いがあるという観点からの分析はあながち間違いとは言えないであろう。しかし、単に単語の意味の問題や文法の問題に

すぎないかもしれない。つまり、(8)系の問題として扱うべきかもしれない。例えば、上記注5で触れたように、(5)群の問題は「文化」の問題ではなく、sorryの意味と「すみません」の意味の違いでしかないかもしれない。つまり、「すみません」には「ありがとう」あるいはthank youに対応する意味があるのに対し、sorryにはないためであり、この状況において日本人も相手に労をとらせたことに対して謝罪しているのではなく、単に感謝しているだけかもしれないのである。個人によって(8)か(9)か異なる可能性や両方の要因が同時に作用している可能性も含め、更に検討を深められる現象と言える。

又、逆に(6)群での命令文の動きの違いは、一見言語的なずれ、つまり(8)の要因が関与していると思われるが、実際には文化的な要因も多少とも関与している可能性を捨てるべきではないかもしれない。つまり、「命令」の文化的使用可能範囲の違いがある可能性もある。

- 10) 例えば関連性理論枠で検討するならば、この要因は、特定の考え方を採用しやすいか否かや、どれだけ頻繁に使っているか否かといった観点から捉えなおせそうである。つまり、「思考の傾向の違い」、いわゆる「考え方の違い」「発想の違い」は、“処理労力”の配分の違いや、特定の思考手順の“呼び出しやすさ”の違いということになる。ただし細部に関しては((8)や(9a)の要因も関与するだろう。
- 11) 「文化」的要因を認めると、上記の、視線の持つ異なる意味合いの例も検討できる。つまり、文化により人間の認知機構への意味づけの仕方が異なりうるという観点から説明を図るのである。

ここで、人間の脳が「目」に敏感に反応するという生理学的な事実を出発点に、この敏感さに「文化」的差異を認めよう。つまり、英語等西洋文化圏では「目」に敏感に反応することに対して「見つめることを尊重する」という意味づけを行い、日本等では同じことに対して「見つめては失礼である」という意味づけを行ったと考える。このように考えることで、脳という認知機構への「文化」の介在を捉えることができるのである。

- 12) 意味上言語的な類似性が一見あるが、文化的背景による違いが大きいと思われる例、すなわち、本節の

現象と似てはいるが異なると思われる例を対比としてあげておこう。

(a) afternoon teaと「3時のおやつ」

両者とも、似たような時間に食するものであり、食べるもの(サンドイッチやケーキ等)も重なっているが、イメージはかなり異なる。すなわち、afternoon teaはいわゆる社交的な文脈で用いられると想定しうる一方で、「3時のおやつ」は子供に関する話題の中で使用されると思われる。この違いは両表現の歴史的背景の違いにあると考えられる。つまり、afternoon teaは、(夕食が日本よりは一般にかなり遅いことから、そのために生じる空腹緩和のため)午後遅くとするサンドイッチなどを含む(お茶というよりはむしろ)軽食のことである。昼食と夕食の間頃にとるものであることは、five o'clock teaともいわれることから垣間見られる。通例飲み物には紅茶を用いたり、表現にもcoffeeではなくteaが取り込まれているのは、イギリスの習慣(つまり、紅茶のほうがコーヒーより一般的であること)が起源であることによる。このように、本来的に昼食と夕食との間の食事であり、大人のためのものであった。あくまで食事の一種であり、かつ西洋圏の(更には中流階級以上と思われる階級の)食事のため、コース料理の代わりとしてのサンドイッチと、デザートとしてのケーキ類が含まれているわけである。一方、「3時のおやつ」は幼児の滋養に関する生活の知恵ともいべき習慣に基づくものであり、昼食と夕食の間、あるいは昼食後3時間後頃に栄養補給を心がけるのがよいだろうとの視点で生じた食事をさすようである。故に視線が子どもに向いているのは当然のことであり、afternoon teaとは文化的に似て非なるものなのである。

- 13) ただし、英語でも“If I were a bird, I could fly to you.”という英文があることから、意味が分化(「(鳥のように羽で)飛ぶ」と「飛行機で移動する」)している可能性は高い。つまり、この種の意味拡張が慣習化しているか、あるいは更に互いに別の意味として言語使用者の脳に登録されていると考えられる。こう考えると、従来の「多義」としての扱いは、少なくとも記述的には正しいことになる。

又、日本語でも文脈次第では可能な場合があると

思われる。例えば、屋根の上に秘密の飛行船があるようなレトロな冒険小説を想像してみると(1')はさほど違和感がないと思われる。

ここでの議論を更に発展させてみるならば、英語では「飛行機で移動する」という意味への拡張への敷居が低いということがまず想定できそうである。更に、(意味の分化があると想定されることから)意味の定着・慣習化の背景として、日本語版とは違い、(1)例えばdriveに「運転する」から「車等で移動する」の拡張用法があるように、動作の意味から移動の意味への拡張用法が比較的一般的なこと(つまりこの拡張自体が認知的パターンとして存在している)、(2)飛行機が身近であることからこのような拡張(つまり(1)で触れた認知的パターンの使用)を求める状況の頻度が高いと思われること、が関与していると考えていくことができるであろう。

- 14) 本学(四天王寺国際仏教大学)には「卒研」やその上位制度としての「卒論」とがあるが、このような例をできるだけ多く集めさせたり、先行研究を学ばせまとめさせることで非常に有益な「卒研」の作成を促すことができると思われる。「卒論」レベルや更には研究レベルとしては、例えば以降の発展を追及させるということが考えられよう。

“could /was able to/できた”の実行性における際の更なる分析としては、この実行性、つまり「した／しなかった」の情報が意味論的意味である(つまり言語的にエンコードされている)か、あるいは語用論的情報である(推意か表意)かの観点から検討する方向がひとつある。より具体的には、couldは「実際にはしなかった」という場面に使われることが多いが、必ずしも非実行とは限らない。そこでcouldの実効性に関する選択肢として、(1)実行(つまり「した」の情報)も非実行(つまり「しなかった」の情報)も、意味論的意味としてエンコードされており、couldは実は実行性に関し曖昧である。(2)「した」が意味論的情報(意味)、「しなかった」が語用論的情報(行間意)である。逆に、(2')「しなかった」が意味論的情報で、「した」が語用論的情報である。(3)「した・しない」に関しては何もエンコードしていない。つまり、エンコードしているのはあくまで「能力があること」であり、実行の

有無は使用の都度語用論的に決まる。(3+)両者の頻度の傾向(つまり実行より非実行で使われることが多いとの想定)から、「しなかった」が従来のGrice派という一般会話推意(generalized conversational implicature)であり、実行の「した」が特定会話推意(particularized conversational implicature)である。以上のようにcouldとそのニュアンスの分析として、(1)~(3)及びそのバリエーションが考えられる。

更に、couldの実際の分析はwas able toや“できた”をどう分析するかにも左右される。つまり、過去における能力に加え、通常実行(「した」)も伝えるwas able toだが、まずこの実行性はキャンセルできないのかどうかの確認を徹底する必要がある。もしできるとすれば、結局この情報は語用論的情報(行間意)に過ぎないのだろうか。もし推意なら、couldとは「した・しない」で逆の傾向があるのはなぜだろうか。そもそも過去形(過去時制)と能力(be able to)の組み合わせから「過去における実行」の意味(或いは示唆)がいかにして成立するのか。更に、又、もし実行が意味論的意味としてエンコードされていたのだとしたら、現在時制(is able to)や未来時制(will be able to)はどう分析すべきだろうか。あるいは後者2パターンは必ずしも実行を伝えないと思われるが、過去時との違いはどう説明できるのだろうか。一方“できた”においても実行の意味が何ゆえ(デフォルト的にしろ)成立するのか、実行は推意なのか意味なのか、という問題がある。つまり、日本語の“できた”は過去の能力を表現するにとどまらず、通常実行も伝えるが、実行の部分をキャンセルすることもできる。すると“できた”の持つ実行のニュアンス(「した」)は、例えば(キャンセルはできるが、文脈なしの場合や通常は生じる、という点で)一般会話推意ということになるのだろうか。どのようにすれば証明できるのだろうか。

又、Grice派の現代版と言える関連性理論では、推意を特定と一般とに区分しない一方で、「処理的意味」や「表意(explicature)」という分析手段を提示していることから、更に異なる(が理想としてより真理に近い)分析ができることとなる。

15) 発展的に考えると、(1) 結局日英語が共通のメカニズムで使い分けされているのか(つまり、teacherは「先生」ではなく「教師」と、「先生」はmasterと、それぞれ同じ類であるのか) 否かという点、(2) 使い分けの決定的要素は敬意の有無か職業・社会的上下のどちらが決定的要因であるのかという点、(3) 「さん」「様」等体系や文脈での相対関係時の使い分けに視野を広げると更にどうなるかという点等、出発点はシンプルだが発展させていくと意外と奥が深いことがわかる。

16) 厳密に言うと、英語でも自動詞から受動態が作られる例はある。しかしこの場合、前置詞と一種熟語的つながりが必要とされる。例えば自動詞のlookは単独では受動態を作れないが、atと結びつくことでatの目的語に相当する表現を主語とした文をつくることができるということが知られている。(8b)においては動詞・前置詞(日本語故後置詞と呼ぶべきか)如何に関わらず目的語はない。

又、日本語の受動態によく観察される「被害」の念とも関係するが、(7b)に相当するような情報を「have+目的語+過去分詞」の、いわゆる「使役構文」を使って表現することがあるが((a))、これも許容度は(方言差・個人差もあるようだが)一般に日本語ほどの容認度の高さではないようである。

(a) She had her son killed.

容認性の低さに関して、言語的あるいは「文化」的な理由がいくつか考えられようが、この構文を用いて子どもが死んだことが親の特性であると表現することが、親と子との一体感を重視する日本と異なり、自主独立を前提とする英語文化の下で容認されないのだという可能性があげられよう。

17) (1) において、英語のpolicemanは「警察の人間」のこととして「警部補」も含めた上位概念として機能することができると考えられる。一方、日本語の「警官」は、典型的には「制服を着たおまわりさん」つまりは「現場クラスの警察官」を指し、「警部補」等も含めた上位概念を表わす表現とはならず、「警察関係者」という概念の下で、「警部補」とは相互排他的な概念を表していると考えることができそうである。このような守備範囲の違いもここでの理解を妨げている要因であろう。すると、ここでは(思考

の傾向という) 文化的影響以外に、言語的影響もあることになる。

18) ここでの議論が大枠正しいとすると、問題の解釈の可否が、突き詰めれば学習により異なっているということに過ぎないこととなり、その分を引き算して考えると日英語ではこの点で認知的機能が異なるわけではなく(これは仮説a-1にとって望ましいことである)、単に問題の「結果-原因」読みを行う解釈過程が英語では想起しやすい、ということとなる。日本語でも「のだ」や「からだ」で「結果-原因」読みを示すことができることも含めて考えると、英語の場合は、デフォルト的な情報処理(「時間順」や「原因-結果」)に加え「結果-原因」の解釈もデフォルトと同じか近い労力で行えると考えられるだろう。ただし以下の(3)の議論参照のこと。

19) 実際の英語の場合、(2)のようなbecauseの使用は、必ずしも間違いとは言えないであろう。ただし、その場合、接続詞ではなく、談話連結語として接続詞から拡張された用法としての分析を行う必要があるだろう。

20) 2.2~2.4より一般化すると、(a) 日本語と英語とで様態の原理(「わかりやすく示せ」)の適用方法あるいは充足方法に違いがある、と言えるかもしれない。つまり、日本語では順序よく、又前後の展開をきちんと示すことでこの原理を守るのに対し、英語では最初にポイントを置くことで「意見・ポイントの明示」を行い、その形でこの原理にのっとっている、といえるかもしれない。あるいは、(b) 日本語は比較的様態の原理を重視し、英語はそうではない、と主張することもできるかもしれない。

いずれにしろ、従来一般に述べられることが多かった、「日本語は英語に比べ議論がわかりにくい」という指摘が、少なくとも発話の提示具合や順序等の点では成立しないことが言えるであろうし、従来の指摘が正当なものであるならば、「わかりにくい」理由が別にあるということになる。このような日英語(あるいは日英語文化圏の発想)の違いに関し、大胆な仮説として、以下のように考えることもできよう。つまり、日本語は文化としては「(自己よりも) コミュニティ重視、相手尊重」であり、このことから、結論を最後に回し、相手の反応次第で結論

コミュニケーションから見た日英語比較

の内容を変えてしまうことすらありえる、と考えてみよう。この場合当然議論の展開が導く帰結として予想される論理性の高い結論と、実際に発話される恣意的な結論とが全く異なることとなる。このことが「議論のわかりにくさ」の根本的原因かもしれない。又、このような議論展開が、逆接が結果的には逆接にならないような状況を生み、英語のbutよりも弱い逆接感の「しかし」を生む土壌となっているかもしれない。この一方で、英語で「順接・逆接」等を明示しなくてもいいのは、そもそも議論展開自体に論理性の高さが求められ、その流れの中では「順接・逆接」を言語表現として明示しなくとも、各文の内容自体及び前後の論理的つながりが自明のものとして理解できるということなのかもしれない。このような「論理性の明示」は、個人主義的傾向の強い社会の中で、他者に合わせることよりも「自身の正当性」をいかに論理的に訴えるかに自己の存在がかかっているという社会によるものかもしれない。

付録：ゼミレベル以上対象時のハンドアウト例

コミュニケーションから見た日英語比較について

語単位、文単位を超えたレベル、談話全体やコミュニケーションの観点から日英語を見てみよう。ここに「文化」(の影響)も見出すことができる。

1：導入：共通項ー暗号解読ではなくコミュニケーションとしての言語

- (1) Nobody goes there any more because it is too crowded.
- (2) We are not here; we are here.
- (3) A: I'd like to go to see the sea.
B: I have no time.

基本的に(日)でも同様のやりとりが可能である。日英語のいずれの場合にも表面的な読み、暗号解読的な読みではコミュニケーションの成立が理解できないことになる。

日英語で(暗号解読的な解釈では不十分だが、両者共)同様に理解できるということに基づき、以下のような仮説群をたてよう。

- (3) 仮説a-1：言語や民族が違っても、同じ人間である以上、その背景にある認知機構やその機構の活動原理が異なるわけではない。
仮説a-2：故に日本語英語に関わらず同様に行間は読める、コミュニケーションは成立する。

しかし、次の(5)群や(6)群はどうだろうか。

- (5a) A: Oh, it is cold in here.
B: I'm sorry.
- (5b) A: お手伝いしましょう。
B: すみません。
- (5b') A: Let me help you.
B: #I'm sorry.
- (6a) Have some.
- (6a') 少し食べろ。Cf. どうぞお食べください。
- (6b) Help yourself (to drinks).
- (6b') 自由にとれ(自分で飲め)。Cf. ご自由にどうぞ(ご自由にお飲みください)。
- (6c) Sit down.
- (6c') 座れ。

仮説a-1、a-2が正しければこれらの状況は生じないはずである。又、西洋文化圏では一般にアイコンタクトが重要であるのにも関わらず、日本等では目を見つめることは良いことではない場合が多い。仮説a-1から考えると一見これは反例に思える。

さて、仮説a-1、a-2の廃棄ではなく、少なくとも基本枠の維持を考えるのであれば、上記の現象を説明する要因を考える必要がある。ここではその要因として(7-1)(7-2)を検討しよう。

(7) なぜ異なる振る舞いをするように思えるのか

- [1] 言語的違い
- [2] 「文化」的違い

2: 具体例、検討例

2.1: おそらくは単語レベルでの違い、言語的な違い

参: 言語的な類似性が一見あるが、文化的背景が大きい

例: afternoon teaと「3時のおやつ」

(1) fly

A: My car has broken down! How can I go there?

B: You can fly there.

A: 車が故障しちゃったよ。どう行かってんだよ。

B: #そこへ飛んで行けばいいじゃない。

(2) move

a: He will move next week.

a: 彼は来週移動する。

(3) wear

a. She wore the red dress.

b. She wore the red dress to the party.

(4) eat

a. Did you eat?

b. Did you eat it?

(5) had betterとshould

a. You had better study Japanese harder.

b. You should study Japanese harder.

(6) could/was able to (と「できた」)

a. He could do it.

b. He was able to do it.

(7) teacherと「先生」

2.2: 類義語の反復: 言語の違いか思考の違いか

(1) “This can't be easy for him,” the lieutenant said. Then he went outside to find Mike. Nancy followed, with Ned close behind.

“You seem pretty shook up,” the policeman said to Mike, who was sitting on the front steps. “You must care a lot about this girl.”

“I do,” Mike agreed. Then, quickly, he corrected himself. “Did.”

“Mike, is there anything you can think of that would explain why Rachel might be in danger?” Nancy asked.

“Or what might have made her leave that note?” Ned added.

“I know what you think,” Mike snapped, still holding Rachel's jacket across his lap. “You think maybe I'm connected with this somehow, that I wanted to get even with Rachel or something! Well, I wouldn't hurt her. I really loved her!”

“That's not what we're saying, son,” the lieutenant said in a gentle voice.

“We're just looking for some kind of lead.”

Carolyn Keene (1998) The Nancy Drew Files: Collector's Edition

(2) Middle children, being neither the oldest nor the youngest in the family, tend to feel neglected and insecure. Yet, being sandwiched between siblings, they are often the family peace-makers, and so they learn to be flexible and realistic. Research has shown that while first-borns tend to be high-achievers, second-borns tend to be more peer-oriented, having more friends and socializing more easily.

2.3: 「時間順読み」対「結果一原因」読み: 「思考手順・文化」の違い(?)

(1) Jane broke her leg. She fell down.

(1') ジェインは足を折った。彼女は転倒した
{のだ／からだ／*Φ}。

(2) Jane broke her leg. Because she fell down.

(3) Jane broke her leg and she fell down.

2.4: 展開の表示: 順接・逆接の明示の義務性の違い

(英)のif文には時に譲歩条件文(even if文)的な解釈があり、andの文にも逆接、つまりbutに近い解釈がある。これは(日)では通常困難である。又、パラグラフ内の各文の展開においても(英)では順接・逆接が連結語で明示されないことが(日)よりは多い傾向にあるようだ。(なお、中国語では英語よりも更に文の連結関係の明示度が低いらしい。)

このことを別の観点から捉えなおすと、(英)では逆接系の意味体系に順接の表現が食い込んでいるのに対し、(日)ではそうではない(「しかし」の逆接感の軽さを考えるとむしろ、順接の意味体系に逆接の表現が食い込んでいる、とさえ言えそうである)。

2.5：数の厳密さ

(1) You must arrive **10** minutes before the departure time.

(1) 出発のお時間の**10**分前においでください。

3：結論

仮説a-1、a-2は維持できるのか、それとも廃棄すべきなのか。修正の必要性や仮説a-3の追加の必要性はどうか。別の仮説体系(仮説b群)を立てるのならそれはどのようなものか。

主要参考文献

- Blakemore, D. and Carston, R. **1999**. “The pragmatics of and-conjunctions: the non-narrative cases.” *UCL Working Papers in Linguistics* **11**:1-20.
- Blutner, R. **1997**. “Lexical Pragmatics”. In: R. van der Sandt, R. Blutner, and M. Bierwisch eds., *From Underspecification to Interpretation*. IBM Working Papers **29**. Heidelberg **1997**, pp. 55-89.
- Carston, R. **2001**. “Explicature and semantics.” *UCL working Papers in Linguistics* **12**, 1-46.
- Carston, R. **2002**. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Fretheim, T. draft. “Marking concessivity in English and Norwegian: A Procedural Approach.”
- Grice, P. **1989**. *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.
- Iten, C. **2000**. “‘Non-truth-conditional’ Meaning, Relevance and Concessives.” University College London PhD thesis.
- Iten, C. **2001**. “But and and” Paper presented in the 4th NWCL International Conference: Coordination: Syntax, Semantics and Pragmatics at Salford University.
- Leech, J. **1983**. *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Levinson, S. C. **1983**. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Recanati, F. **2004**. *Literal Meaning*. Cambridge University Press.
- Sperber, D. **2000**. “Metarepresentations in an evolutionary perspective” in Dan Sperber ed. *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Oxford University Press, **2000**, pp.117-137.
- 山崎英一 **1995**. 命令文使用＝「命令」か：関連性理論による日本語分析例.『未発』ひつじ書房.
- 山崎英一 **2003**. 日英語比較基準としての「会話の諸原則」. 四天王寺国際仏教大学紀要 人文社会学部第**36**号・短期大学部第**44**号.
- 山崎英一 **2004**. 解釈に干渉する文化的制約：二重性仮説と文化的モジュール.『「ことば」のからくりー河上誓作教授退官記念論文集一』河上誓作教授退官記念論文集刊行会編. 英宝社.
- Zegarac, V. **2002**. “Pragmatics as Social Science”. Gakushuin University Workshop 『関連性理論の射程』に於ける口頭発表.